

設問Ⅰ

汎用型であれエキスパート型であれ、記号論理系のAI研究では無限に近い計算を必要とするフレーム問題に対応できなかったが、現代の生成AIはこれに神経回路系の研究が統合して生まれた。脳のような身体の中の何かが外界からのデータを計算して反応するという古典的知能の捉え方は生成AIの登場によって無効になったが、ここでは人工の意味について考える。カントにおいて物理法則に従って作動する巨大機械である自然は人間の意図や自由と対立するものの、技術とは必ずしも対立しない。というのも、技術一般はその外部に目的を持ち、その点で自然と区別される。だが芸術と呼ばれる美しい技術はそれ自体の中に目的を持ち、技術であると同時に自然に見えるからである。このように技術と自然の間には相互に照らし合う二重の関係があり、AIにはこの二重性が見て取れる。

設問Ⅱ

【解答例1】

建築とは人間活動のために人工的な空間や構築物を設置する行為であり、その技術はエネルギーや建材の調達から廃棄まで、自然の収奪と破壊という側面を持つ。これに対し、二十世紀の建築家フランク・ロイド・ライト

は、建築は自然の一部であるべきという考えのもと、コンクリートを基礎にしたモダンな建築に現地で調達した石材や間伐材など「自然の産物」を融合させることで、周囲の景観と調和した「芸術的建築」を数多く遺した。翻って、日本各地にも固有の風土が生み出した技術の結晶が存在する。これらは長年の風雪に晒されることで、周囲の自然環境に一層溶け込んで見える。豪雪地帯の合掌造りも、石灰岩の石垣に囲まれた開口部の大きな沖縄の家も、「快適な暮らし」という人間の欲求が、自然との対立ではなく妥協によって満たされることの証だ。こうした「用の美」を生み出すのが、それ自身の目的に合った「美しい技術」である。

【解答例2】

私が住む千葉では、東京湾から市原の工場などの夜景を眺める遊覧船ツアーがある。私も乗船したことがあるが、工場街には鉄を作る溶鉱炉があり、暗闇をバックに火が煌々と燃える様は「美しい」の一語に尽きる。工場萌えブームが去った後もこのツアーが相変わらず人気なのは、多くの人にとってその美しさに目を見張るものがあるからだろう。

この溶鉱炉の火には、筆者がいう技術と自然の関係の二重性が見て取れる。鉄鉱石から

鉄を作る技術は自動車や建築物などを作ることの元元にあり、まさに人間の諸種の目的を実現するための基礎となるものである。だがその美しさは、富士山の絶景と同じく、人間の意図とは無関係に勝手に出来上がったもののように見える。それは特定の目的に寄与する技術でありながら、人間の自由な想像力の働きⅡ遊びの結果として美的感動へと誘うのである。

【解答例3】

対話生成AIの技術的達成は素晴らしく、質問への回答言語も、利用者とのやりとりも、十分に自然なものに感じさせる。誤答可能性は常にあるが、誤答もまた対話の遊び的要素を高める役割を担い得る。むしろ生成AIは次々と言葉を連接させ続けているだけであり、実世界での体験的な裏付けを持たない。その点で記号接地問題が指摘されてもきた。

だが、AIと対話を継続すると、その技術的な側面への意識が希薄化し、言葉の自然らしさの故にAIに人格を仮想し始める。機械相手に気兼ねをして、軽薄な言葉の使用を躊躇し、自分に放たれうる言葉を予想して心的な防御をする。抗いようもなく、テキストの向こう側に、知性や魂をもった主体をイメージしてしまうのである。それは相手の言葉に

触発された、少しおかしな自己意識の投影であるに違いない。技術が高度化し、「同時に自然にみえる」ようになるとき、人間の意識は奇妙にもアニメズムに回帰するようだ。

【解答例 4】

生成AI開発のフロントランナーであるサム・アルトマンは、AIエージェントに自分のパソコン操作を丸ごと任せた先の未来社会を展望する。やがて必要な知的作業をすべて肩代わりするAIエージェント同士がSNS上で勝手に会話し、情報を集め、他のエージェントと組んで新しいアイデアを生み出すようになるのだ。彼は、それが面白くならないわけがないと言う。彼にとってAIは、筆者の言う、その目的がそれ自身の中にある自由な遊びとしての技術であり、それがもたらす未来は、必然的で逃れようのない「自然の所産」に見えるのであろう。

筆者はこのことを芸術的活動としても見ようとするが、私はそこに危うさと不気味さを感じる。従来の芸術とは異なり、その技術は全ての人間を巻き込み、機械的強制力で人間と社会を方向づけ、作為||自由意志とそれに伴う責任という人間像とそれを基盤とする社会原理を無効化してしまうからだ。